



—2025年の経営を振り加している—
返って

—26年の展望を

「防衛施設関連の調査業務や災害復旧、洋上風力発電関連などが重なる売り上げを大きく伸ばすことができた。埼玉県八潮市での道路陥没事故を受けて、老朽化した管路への対応が急務だという認識が広がったこともあり、地中の管路や空洞の調査に有効な地中レーダー探査の引き合いは大きく増

つなぎ目の探査結果に空白が生じている場所もある。ここをシームレスにつなぐニーズに対応していく」
「海底に地震計を並べて微動を測ることで、地盤の速度構造を推定する技術も展開している。この技術を生かせば、洋上風力の基礎を打つ際に、どの深さが支持層になるかを効率的に評価できる。ボーリング調査と組み合わせる提案

性もあり得る」
「発注者側も技術者が減っており、これまでのように細かい仕事を個別に発注するのではなく包括的な契約を結ぶ方向に進んでいる。その中で、本業である地質調査単独の仕事は、どちらかと言えば減っていくだろう。包括的な業務を受注できる企業とタッグを組む、枠組みの中に入っていくことが必要不可欠になる」

沿岸域の調査技術に注力

—力点を置く技術開発は

—していきたい—

「沿岸域での調査技術に力を入れていく。洋上風力発電施設の整備に対応した港湾整備や放射性廃棄物の地層処分などでは、陸と海をつなぐ部分の調査が重要になる。従来は、陸と海で調査エリアが分断されてきたため、陸と海の

「地域に強みを持つている企業やボーリング、設計などの地質調査と上流・下流でつながる企業との連携を模索していく。災害時の迅速な対応のためにボーリングなどの業務を内製化するという方向

「同時にわれわれも、ただ調査をするだけでなく、斜面の対策検討や河川堤防の設計といった岩盤や土に対する深い知見がないと実施できないコンサルティングのような仕事にも力を入れていく」



横顔

今年の一字は「心」。「相手の本当の望みを推し量ることが、われわれの仕事では不可欠だ」とし、他者を思いやる感受性の大切さを説く。

